

## 特集 布施美術館所蔵の日本古写経

〈施設紹介〉布施美術館／赤尾 栄慶

布施美術館所蔵の『画図讃文』について／田林 啓

『禅林類聚』と『禅林跋類聚』／池田 道浩

《新刊紹介》

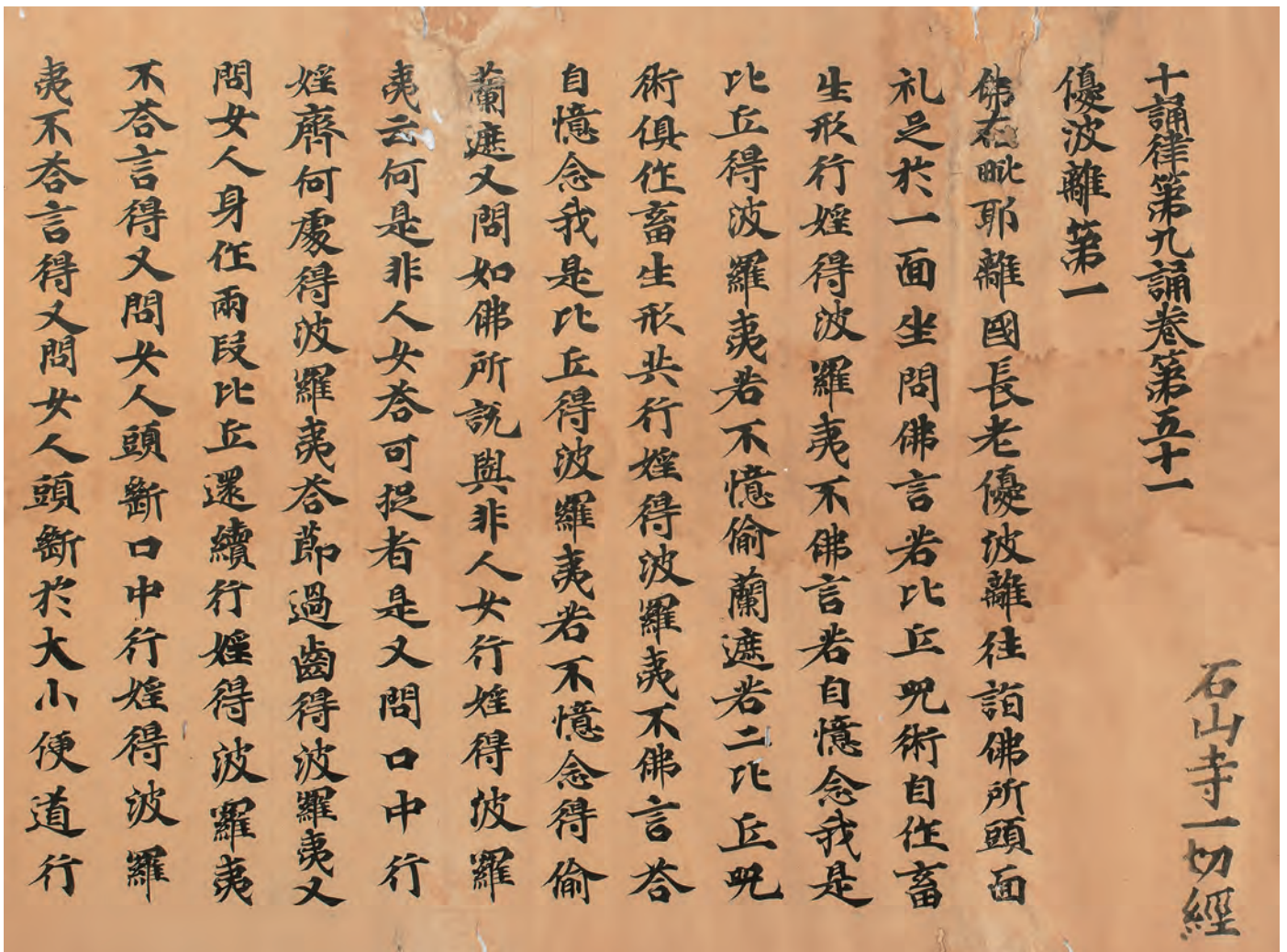
日本古写経善本叢刊第十一輯『国宝 金剛場陀羅尼経』／長尾 杏樹

《TOPIC》

落合科研費研究室の活動報告

「奈良朝勅定一切経」データベース構築プロジェクト／赤塚 祐道・青木 佳伶

バチカン図書館の日本古写経と中国元王朝の紺紙金字写経／落合 俊典





## 国宝『金剛場陀羅尼經』本と同筆の十二文字

落合 俊典

日本の古写経で最も有名な經典は何と言っても国宝『金剛場陀羅尼經』であろう。書写年代は西暦六八六年。しかし、この国宝本には紙背に「天平十八年」(七四六)という年号が見られ物議を醸した。幸い『金剛場陀羅尼經』の五月一日経との比較検証でその地位が揺らぐことは無かった。ただ、内題下に書かれている一文字「備」をどう捉えるかで議論が続いたが、国宝本の熟覧調査が許可され本文と同筆と見なされた。その結果、吉備真備が本経を入手して自らの一字を書き込んだ可能性は否定された。ただ、未だにその意味を解明することは出来ていないのでこの研究は終わりが見えない。

\* \*

想いを巡らしていたところ、「備」の問題解決には繋がらないが国宝本と同筆の文字と思われる十二文字の経切れが出現した。それも北京の愛好家が入手したという。その画像が研究所のアドレスに送られてきた。鑑定の依頼である。こちらはとても鑑定できるほどの

力量を有しないが、本経に関わった経緯もあり、一応「似ています」とし、文末に写真や画像では判断は差し控えると返信したところ、翌週には現物持参で大学へやってきた。某氏の尋常ならざる静かな熱情が所内の空気を赫赫と染め、初唐の書家欧陽詢(五五七～六四一)欧陽通(？～六九一)の影響を受けた書は敦煌に残っていない、極めて貴重な断簡であると推定し、しかもこれは日本のヤフーオークションで購入したものだ。私の「似ています」という返信に勢いを得て、これを高精細かつ拡大文字も入れたカラー印刷のパンフレットまで作成し持ってきた。前のめりの某氏は、恐らく我が人生最高の日となるかどうかと固唾をのんで筆者を凝視している。その圧力にこちらの心は穏やかでなくなった。

が、しかし幸いにも工作された偽物ではないことが分かり「同筆です」と簡略に答えた。

\* \*

某氏のカラーパンフレットに「是行故合積大辯當作是觀皆

是觀皆」の十二文字は『大宝積經』卷第十三「密迹金剛力士会」の一部(『大正藏』十一卷七十四頁中段十七行～十八行)と書かれていたが、これは些か苦しい。何故ならば国宝本の書写年代は六八六年であるから国宝本の筆師はこの前後に活躍したことになる。しかし、『大宝積經』は七一三年に菩提流志が編集・翻訳した百二十巻の經典であるので翻訳後直ちに日本へ伝来したとしてもほぼ二十七年も経過することになる。編纂前には竺法護訳『密迹金剛力士經』七巻として通行していた経巻である。もっとも筆師が長寿であったならば『大宝積經』の可能性も強ち否定できないことになる。

\* \*

昨今「備」の一文字、欧陽詢風の十二文字が話題をさらったが、日本古写経の研究がこのように文字、書風にまで展開するとは想定していなかったために日本古写経の書道史研究の充実化が今後の課題になつてきたと言っても過言ではないだろう。

(国際仏教学大学院大学教授・日本古写経研究所所長)



断簡十二文字(所蔵者画像提供)



## 目 次

### 《巻頭言》

国宝『金剛場陀羅尼經』本と同筆の十二文字	落合 俊典 (1)
----------------------	-----------

### 特集 布施美術館の日本古写經

〈施設紹介〉布施美術館	赤尾 栄慶 (3)
布施美術館所蔵の『画図讃文』について	田林 啓 (6)
『禪林類聚』と『禪林跋類聚』	池田 道浩 (9)

### 《新刊紹介》

日本古写經善本叢刊第十一輯『国宝 金剛場陀羅尼經』	長尾 杏樹 (11)
---------------------------	------------

### 《TOPIC》

#### 落合科研費研究室の活動報告

「奈良朝勅定一切經」データベース構築プロジェクト	赤塚 祐道・青木 佳伶 (12)
バチカン図書館の日本古写經と中国元王朝の紺紙金字写經	落合 俊典 (13)

既刊書・スタッフ紹介	(15)
------------	------

いとくら：私たちが調査している古写經を収める「經藏」からの造語。「經」を意味するサンスクリット語“sūtra”には「いと」などの意味があり、また「經」には「たていと」という読みがあることから、「經藏」を「いとくら」と読んでニュースレターのタイトルとしました。



# 布施美術館所蔵の日本古写経

## 〈施設紹介〉布施美術館

赤尾 栄慶



布施美術館外観

滋賀県湖北地方の「知る人ぞ知る」美術館、布施美術館を紹介したい。創設者は、当地生まれの医師、布施巻太郎（一八八一—一九七〇）であり、そのコレクションは古写経をはじめとした仏教典籍や禅林墨蹟などの仏教関係資料、医学薬学関係資料、そして富岡鉄斎（一八三六—一九二四）の最晩年の二年間（大正十一年—大正十三年）に親交を得て入手された鉄斎の作品群や地元の名画家として知られる片山雅洲（一八七二—一九四二）の作品など、合わせて一千五百点余の作品からなっており、「自ら収集したコレクションを国民の文化遺産として永く後世に残したい、広く社会教育に活用したい」との巻太郎の理念をもとに昭和三十五年四月に一般公開が始められた。

現在は巻太郎の孫にあたる方が館長を務められているが、云うまでもなくそのコレクションの中心をなしているのは富岡鉄斎の作品群であり、宝塚市の鉄斎美術館と双璧をなすものとして有名である。昨年四月から十一月にかけて京都、富山、碧南の三カ所を巡回した「没後一〇〇年 富岡鉄斎」展に布施美術館からは十五件の作品が展出され、更に同年九月二十一日から十一月二十四日までを会期として長浜城歴史博物館では「富岡鉄斎没後

### 大智度経卷第六十一

般若波羅蜜正義有人未來世說相似般若者會中人聞說正憶念作是思惟何者是耶憶念是故故說相似般若波羅蜜相如人知是道非道故能捨非道行正道復次憐愍未來世衆生不見佛及諸大菩薩但見經書耶憶念故隨著音聲說相似般若波羅蜜相似者名字語言同而心義異如以著心取相說五衆等无常乃至无生无滅是相似般若若以不著心不取相說五衆无常但為破常顛倒故不著无常是真實般若如是說法人教捨相似般若波羅蜜備習真般若波羅蜜是名說般若波羅蜜正義勝前功德

天平六年歲次甲戌十月廿三日寫對國寶院藏經寺

富岡鐵齋

一〇〇年企画展 富岡鉄斎—布施美術館コレクションのすべて—という展覧会に関連する作品を含む百三十七件が展出されたとところである。

このような収蔵品のうち当研究所との関連からすれば



当然のことではあるが、古写経などの仏教典籍を紹介しなければならぬ。奈良時代の経巻では『大智度論』巻第六十一（針間国知識経）、「五月一日経」、『大般涅槃經集解』卷第三十二、「神護景雲経」薬師寺経の五件が滋賀県の文化財に指定されており、平安時代では「中尊寺経」「神護寺経」などが収蔵されている。

最初の『大智度論』は、天平六年（七三四）播磨国・既多寺において結縁書写されたもので、地方における「知識経」の遺品として価値が高い。また天平年間前期の遺品として

も貴重な一巻となっているが、本文に平安時代前期と見られる白点が施されており、訓点資料としても重要な一巻となっている。

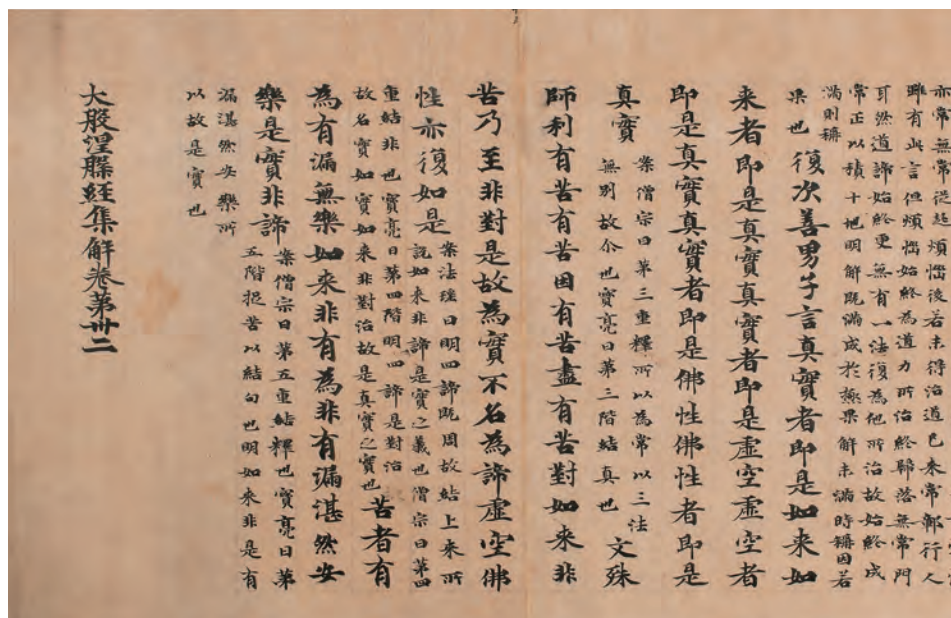
光明皇后の発願になる「五月一日経」である『仏本行集経』巻第四十一の一巻については、既に「いとくら」第十一号の表紙を飾り、『古写経紹介』布施美術館所蔵の五月一日経」として林寺正俊北海道大学大学院准教授（当時）が紹介をしている。

『大般涅槃經集解』巻第三十二は、いわゆる「注経」の遺品であり、『大般涅槃經』に対する諸家の注釈を経文の間に割注として挟み込んだ体裁で書写されているものである。このような「注経」形式の写経は、奈良時代の写経の中でも比較的遺品が少なく、貴重な一巻となっている。

「神護景雲経」と通称される『十誦律』第九誦巻第五十一は、称徳天皇が神護景雲二年（七六八）に発願書写せしめた一切経であり、巻末に韻文である頌を主体とした格調高い発願文を有することでよく知られている。本文の字すがたは、奈良時代後期の特徴である肉太でやや大粒なものとなっており、従来から正倉院に七百四十巻前後、巷間に三十巻ほどが伝存しているとされてきた。ところが、平成二十四年三月の『正倉院紀要』第三十四号に飯田剛彦「聖語蔵経巻『神護景雲二年御願経』について」が発表され、従来から「神護景雲経」とされているものほとんどが「今更一部一切経」であり、確実に「神護景雲経」と判断されるものは願文のある四巻のみであるとの報告がなされた。これにより、「神護景雲経」の希少価値が頗る高くなったことである。

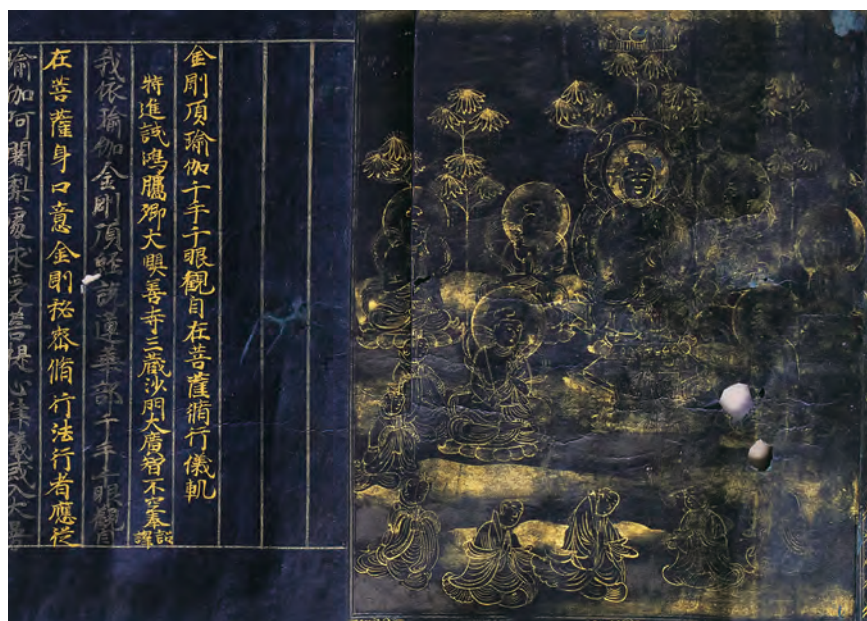
「薬師寺経」は、奈良時代後期を代表する『大般若経』であり、弘法大師空海の書の師とされる朝野魚養が書写したという伝承があることから、「魚養経」とも呼ばれている古写経である。収蔵されているのは巻第百九十一の一巻であり、首題の部分に「薬師寺印」の朱円印が二顆、

#### 『大般涅槃經集解』巻第三十二



第一紙の表紙に近い紙背に「薬師寺金堂」の墨印が一顆捺されており、軸には白密陀の軸端が付けられている。経文は肉太で重厚な字すがたとなっており、現在その大部分の三百八十七巻（国宝）が大阪・藤田美術館に所蔵されている。

平安時代では、紺紙金銀字の『金剛頂瑜伽千手千眼観自在菩薩修行儀軌』の一巻がある。この一巻は、奥州平泉の藤原清衡（一〇五六―一一二八）が発願し、永久五年（一一一七）から天治三年（一一二六）頃にかけて書写され、完成後には中尊寺に奉納されたと考えられる紺紙金銀字一切経、通称「中尊寺経」のうちの二巻と見てよい。



『金剛頂瑜伽千手千眼観自在菩薩修行儀軌』(中尊寺経)



平安時代後期を代表する古写経でもあり、その基本的な書写の形式は、紺紙に経文を金字と銀字で一行ごと交互に書写するものである。このような形式で書写された一切経は、わが国のみならず、漢字文化圏の中でも特筆すべき写経になっており、表紙には金銀泥で宝相華唐草文が、見返しには釈迦說法図を中心とした見返し絵が描かれ、軸端には撥型鍍金魚子地四弁花文の軸首が装着されている。

「紺紙金字四自侵経」は、巻首内題下に「神護寺」の朱方印が捺されていることから、紺紙金字一切経である「神護寺経」のうちの一卷と知られる。この一切経は、鳥羽院の発願になったものを後白河院の御代になって神護寺に施入されたと伝えるものであり、表紙には金銀泥で宝相華唐草文、見返しには釈迦說法図、軸首には撥型鍍金魚子地四弁花文の金具が装着されている。まさに平安時代後期を代表する「紺紙金字一切経」の一卷である。

これらの古写経以外で注目すべき写本としては、『画図讃文』の巻第二十五と考えられる断簡三十三行がある。『画図讃文』は、中国・唐時代に仏教絵画とそれに付随した讃文を集めて成立したとされるもので、内容的には『大唐西域記』『法顕伝』『集神州三宝感通録』や南齊・竟陵文宣王蕭子良の『浄住子浄行法門』などの記述を引いて讃文を構成するものである。断簡三十三行のうち、第一行目は「画図讃文」とあり、もとは外題・首題・尾題のいずれかの部分を切り取って貼り継いだ箇所と見られ、二行目以降は『広弘明集』巻第二十七所収の「十種慚愧門第十七」からの引用となっている。また別途収蔵される古写経の断簡十三種を貼り継いだ「古写経集」にも『画図讃文』と見られる断簡四行―最初の二行が『広弘明集』からの引用、後の二行が『法苑珠林』からの引用であり、後者もその字すがたや書写の形式から『画図讃文』の断簡と見られる―があり、合わせて三十七行分が確認できる。書写年代は、

唐時代七世紀や奈良時代と見る向きもあるが、稿者としては平安時代九世紀におきたいと思う。この『画図讃文』については、後掲の田林啓「布施美術館所蔵の『画図讃文』について」に詳しい。



『四自侵経』(神護寺経)

これら仏教関係の書跡については、当研究所が令和三年から継続的な調査を行っており、近い将来、その内容が目録化される予定である。

また医学薬学関係の書跡については、門外漢であることから、ひとまず書名を記すのみに留めたい。中国の版本ではいづれも明時代の『証類本草』三冊や『広嗣紀要』一冊、『瘍医準繩』十一冊などがあり、いわゆる朝鮮本では『東医宝鑑』二十五冊がある。また和本では、室町時代の写本『眼科秘伝抄』一冊、江戸時代前期の写本『薬性延寿論』一冊や『腫物治療書』一冊、『済民記』二冊、『調剤書』一冊などが収蔵されている。

まさに巨象の一部を撫でるが如き紹介ではあるが、以上で布施美術館の紹介としたい。

(正式名称) 一般財団法人 布施美術館

\* 現在は非公開となっている

(所在地) 滋賀県長浜市高月町唐川三三九番地

(館長) 布施 秀 茂

(京都国立博物館名誉館員・本学日本古写経研究所特別研究員)

参考とした展覧会目録

\* 「特別展 布施コレクション名品展」 滋賀県立琵琶湖文化館、滋賀県立長浜文化芸術会館 一九八三年十一月

\* 「布施巻太郎没後三〇年記念 企画展『(財)布施美術館名品展』」 高月町立観音の里歴史民俗資料館 二〇〇〇年十月

\* 「没後一〇〇年 富岡鉄斎」展 毎日新聞社 二〇二四年四月

\* 「富岡鉄斎没後一〇〇年企画展 富岡鉄斎―布施美術館コレクションのすべて―」 長浜城歴史博物館 二〇二四年九月

# 布施美術館所蔵の『画図讃文』について

田林 啓

この度、落合俊典氏をはじめとした国際仏教学大学院大学の諸氏および赤尾栄慶氏による布施美術館所蔵古写経の調査に参加させて頂き、同館所蔵の『画図讃文』を拝見する機会を得た<sup>①</sup>。本稿では、その基礎的な知見を紹介する。

## 一 『画図讃文』とは

『画図讃文』は、もと東大寺塔頭の尊勝院に所蔵され、明治の初め、正倉院聖語蔵に文書類が移管された際に、民間に流出した。当初全三〇巻から成り、その名の通り、画卷とそれに対応する讃文（解説文）によって構成されていたと推測される。撰述者は、唐の道宣或いはその一派、成立年は六六四年頃～七〇〇年頃と考えられる。旧尊勝院蔵の諸巻は、内藤湖南、中田勇次郎によつて、正に七世紀の唐において書写されたものとされる。周知の通り、唐以前の伝世の絵画（画卷や掛福等）がほとんど残されていない今日において、その価値は極めて高い。これまで、巻第二六の残巻が東京・大東急記念文庫（重要文化財）、同巻の断簡が五島美術館、巻第二七が神戸・白鶴美術館（重要文化財）にそれぞれ所蔵されていることが知られていた。いずれも讃文部分で、褐麻紙（或いは楮打紙）<sup>②</sup>に一行十三～十四字を書

す。これらによつて、『画図讃文』は、南斉・蕭子良撰述『浄住子浄行法』（南斉・王融による頌を附す）を骨子

として、『高僧伝』や『大唐西域記』等の内容を基とする仏教聖跡・瑞像に纏わる奇瑞説話を組み合わせるこゝとが分かる。浄住子の性格から推測して、中国における在家者の仏道修行向けの、画卷付随テキストとして機能したと考えられる。画卷部分は、未だに見いだされないが、巻第二六に第十八～二〇図、巻第二七に第二一～二三図の三図ずつの讃文が記されており、後者の奇瑞譚と重複する内容が敦煌莫高窟の初唐・第三二三窟の画卷式壁画に描かれる。加えて、第三二三窟は浄住子に性格を重ねる戒律画も描くため、『画図讃文』に込められた道宣派の思想や計画の波及力の一端を示すと言える。

\* \*

巻第二七は、白鶴美術館創立者の七代目嘉納治兵衛によつて、明治四三年に既に影印本が出版され、広く公開されたが、この影印本に付された内藤湖南の跋文も当時の同本の散逸状況を示す点で重要である。すなわち、巻第二七は、税所篤の手を経て白鶴に伝わったが、この他に、浪速の上野氏（理一か）が三三行及び二行（いずれも浄住子十種極大慙愧門及び偈）、橋井氏（善二郎か）が十行（浄住子断絶疑惑門及び偈）、寧楽の石埼氏が二行（浄住子極大慙愧門）、寧楽の中村氏（雅真か、嘉納治兵衛の実兄）が三〇行（行記・聖跡に関する内容）をそれぞれ所蔵し、いずれも巻第二五の

一部であると述べ、また、東京の古澤氏が一卷を所蔵すると言う。このうち、古澤氏蔵の一卷は、比較的整った卷子本である現大東急記念文庫所蔵の巻第二六に当たる可能性があり、また大東急本の浄住子が極大慙愧門から始まることから、石埼氏蔵の二行も巻第二五ではなく、巻第二六の一部であったことが分かる。

## 二 布施美術館所蔵の『画図讃文』

布施美術館本は、これまで研究者の間でその存在が知られてこなかった。二種あり、いずれも完品ではないが、一方は『画図讃文』として卷子本を成すのに対して、もう一方は断簡であり、他の八種の古写経と共に『天平古写経集』として卷子に仕立てられる。いずれも一行十四字、楮打紙（或いは褐麻紙）に書され、字姿も含めて、既に知られる『画図讃文』と一具のものであったことに疑いはない。

\* \*

卷子本（挿図1）は、五紙から成り、軸は象牙を用いる。見返しと巻末には、金地に銀の切箔を散らした紙を用いる。表紙には八角形と四角形を組み合わせた幾何学文を描く黄赤色の裂を使い、かつ八角の枠内に四稜の花文ならびに対鳥文、または四獣文を入れ、四角の枠には四稜花文を表す。裏打紙と天地には、金箔を散らした紙を用い、かつ天地には銀箔も散らす。表具の趣は、白鶴本や大東急本のそれと似通っており、裏打紙や糊が固く、それに影響された本紙が所々に折れや亀裂を起こしている点も同じである。表紙近くの裏打



紙に、「財団法人布施美術館之印」と「玄道人」(布施美術館創立者布施太郎の号)<sup>6)</sup>印が押してあり、第五紙向かって左下隅に「月明荘」(古書肆「弘文荘」反町茂雄)印がある。本紙は、全てで三三行、縦二四・六cmで、幅は各紙によって大きくばらつく。すなわち、第一紙が三・九cm、第二紙十三・〇cm、第三紙四四・九cm、第四紙十三・六cm、第五紙九・八cmと続く。<sup>7)</sup>第一紙と第二紙の間には、当初、目次と説話、および浄住子の一部が記されていたが、それらは全て抜き取られており、極端に短い第一紙は、題記「画図讃文」のみを書しており、巻頭を成していた箇所である。第二紙以降は、浄住子の第十七門「十種慙愧門」の途中から最後まで、すなわち、慙愧の十条を箇条書きに述べる箇所から「慙愧門頌」までである。十条とは、一条…諸仏、二条…父母、三条…諸子、四条…師僧、五条…弟子、六条…帝王、七条…檀越、八条…良友、九条…所化諸人、十条…天龍神鬼への諸慙愧を示す。ただし、現存する『弘明集』所収の浄住子(節略本)<sup>8)</sup>と比較すると、第十条以外では省略が為される。<sup>9)</sup>

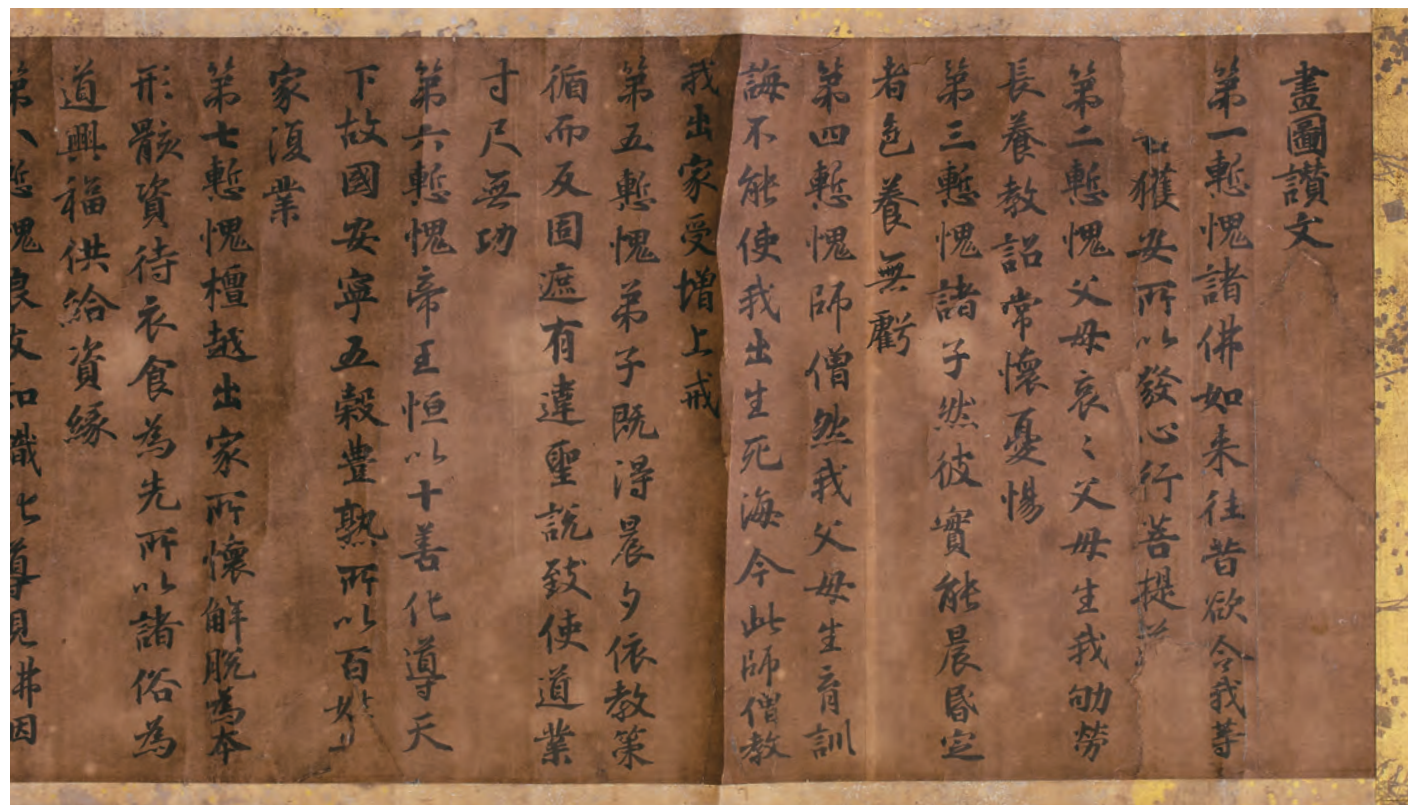
浄住子の内容から、本巻は大東急本(巻第二六)の前に位置する巻第二五の題字と最後部の浄住子の箇所を抜き出して、組み合わせたものと考えられる。巻第二五は、画巻第十五図(第十七図の讃文を記していたと推測され、本巻の浄住子はこのうち第十七図の讃の一部に当たる。

\* \*

つづいて、『天平古写経集』に収められる断簡(挿図2)についてみていく。『天平古写経集』の箱には、売買のための札と手書きのメモが入れられ、前者に「弘文荘」(古書肆「弘文荘」反町茂雄)印および「弘文荘

印」が押され、後者に「益田孝翁所集」と記録される。古写経集には二種の『画図讃文』断簡が連ねて貼り合わされており、いずれも縦二五・三cm、二行を書す。前方断簡が幅四・一cmであり、当初は、先の卷子本の第二紙と同紙を成していたと考えられ、その前段を成す内容の浄住子を記す。後方断簡は、幅三・九cm、『大唐西域記』に基づくインド「摩臘婆国(マールヴァ)」の大慢婆羅門の説話、すなわち大乘を謗ったために裂けた地の下に転落した旨を示し、続いて、「西南至大海」と旅行記の続きを記す。その極めて簡略した書き方は、道宣『釈迦方志』や道世『法苑珠林』所収の同内容と近似する。<sup>11)</sup>

以上の布施美術館所蔵の三三行の卷子本、および断簡のうち浄住子を記す二行は、いずれも浄住子極大慙愧門およびそれに付随する偈であるため、先に引用した巻第二七の影印本の内藤湖南跋文を改めて参照すると、これらは画図讃文の巻第二五の一部であり、浪速の上野氏、つまり上野理一旧蔵品である可能性が高い。奇瑞説話を示す二行の断簡については、当初の位置も



挿図1 画図讃文 巻第25 布施美術館所蔵



不明である。  
『画図讃文』の更なる再発見と研究の進展に期待したい。

(大阪市立美術館学芸員)

(1) 調査参加の機会を与えてくださいました布施秀茂氏(布施美術館)、落合俊典氏、池田道浩氏、前島信也氏(以上、国際仏教大学院大学)、赤尾栄慶氏(京都国立博物館)に感謝申し上げます。

(2) 以上、拙稿「『画図讃文』をめぐる一白鶴美術館本(巻第二七)を中心に」藤井淳編『古典解釈の東アジア的展開—宗教文献を中心として』京都大学人文科学研究所、二〇一七年、九七—一三六頁(田林啓『敦煌美術東西交界史論』中央公論美術出版、二〇二二年再録)、定源『日藏唐抄本『画図讃文』及其作者考述』『域外漢籍研究集刊』第十五輯、二〇一七年、三〇三—三四七頁参照。以下の内容も拙稿を基にする。

(3) 嘉納治兵衛(七世)・狩野直喜・内藤湖南『画図讃文』油屋博文堂、一九一〇年、大阪市立美術館編『唐抄本』同朋舎出版、一九八一年、一七四頁。なお赤尾栄慶氏は平安写経との見解を示しておられる(同氏よりご教示賜った)が、筆者は唐・七世紀説を支持する。

(4) 従来褐麻紙とされていたが、今回の調査で同類の紙に対する赤尾氏の見解では楮打紙とする。今後の分析の結果を俟ちたい。

(5) 前掲嘉納治兵衛(七世)ほか『画図讃文』一九一〇年。

(6) 布施秀茂氏よりご教示賜った。御礼申し上げます。

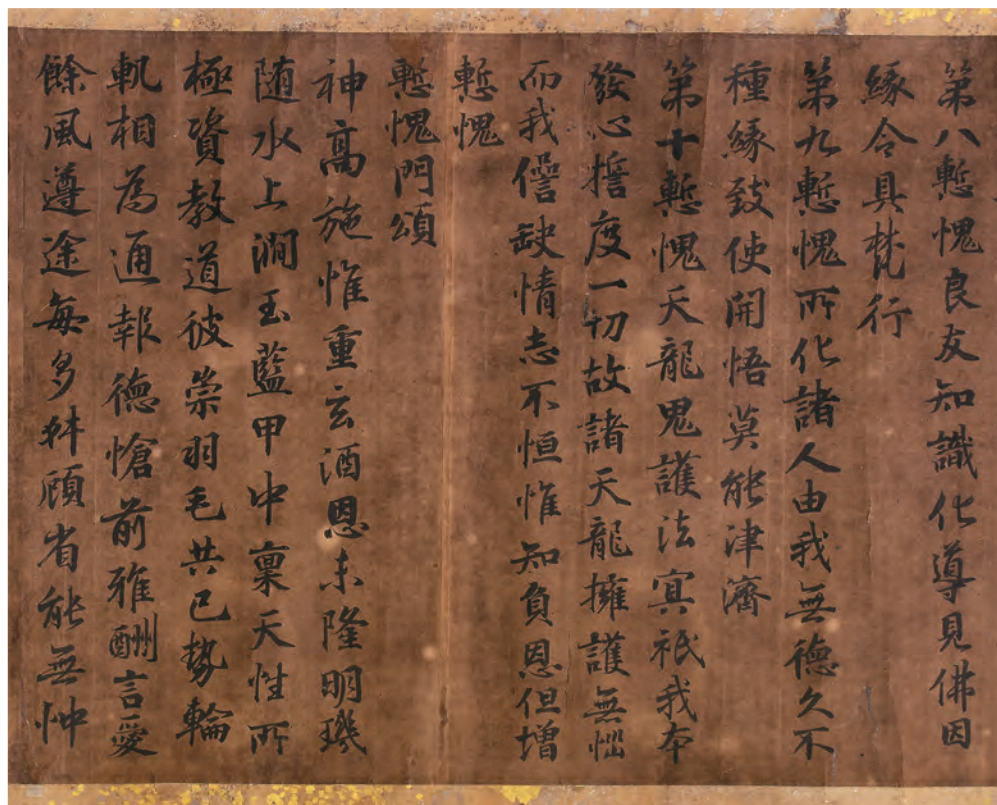
(7) 赤尾氏の見解に基づく(前島氏よりご教示賜った)。御礼申し上げます。下記の断簡の法量も同様。

(8) 船山徹『南齊、竟陵文宣王蕭子良撰「浄住子」の訳注作成を中心とする中国六朝仏教史の基礎研究』報告書、二〇〇六年、五〇—五一頁。

(9) 一条…「忍苦受辱」如説修行」、二条…「既為人子」深為可愧」、三条…「而終貧煎」実為可愧」、四条…「懷羅漢胎」深為可愧」、五条…「一生空過」亦可深愧」、六条…「出家之人」深是可恥」、七条…「故隆正業」亦可深愧」、八条…「大經昌示」深可為愧」、九条…「故令聽者」深可慙愧」がそれぞれ省略される。

(10) 『大正蔵』第五一卷、九三二頁。

(11) それぞれ『大正蔵』第一五一卷九六一頁および第五三卷、四九六頁。



挿図2 画図讃文断簡  
天平古写経集のうち  
布施美術館所蔵



# 『禅林類聚』と『禅林跋類聚』

池田 道浩

## 一 はじめに

『禅林類聚』(二十巻)は禅の公案を集めた巨大な文献。数多くの語録を内容ごとに一〇二に分類し整理したもの。元で成立の後、五山版が刊行され、さらに訓点本も作られた。その後、六分の一程度の抜き出ししたコンパクトエディションの『禅林「跋」類聚』が古活字版として流布した。布施美術館には『禅林類聚』と『禅林「跋」類聚』が所蔵されているが、後者の『禅林「跋」類聚』は、他の類書とは異なる極めて重要な古活字版である。

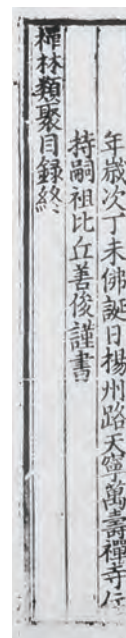
## 二 『禅林類聚』について

現在ではオンラインで画像がいくつも公開され、テキストデータベースも構築されつつあり、<sup>①</sup>以前に比べれば飛躍的に利用しやすくなった。いくつかの版本が存在するが、以下の四種に分類できる(表一)。

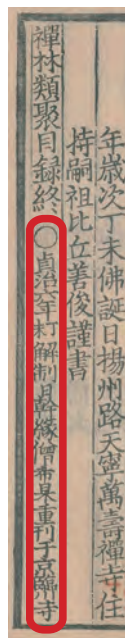
表一

通称	罫線	訓点	オンライン公開 影印本
A 元刊本	罫線		宮内庁書陵部
B 五山版	罫線		国会図書館 『禅学典籍叢刊』第八巻
C 五山版複製			関西大／東北大 禅文化研究所『禅林類聚』
D 訓点つき		訓点	国会図書館／駒澤大 電子達磨

A. 元刊本、大徳十年(一一三〇六)<sup>②</sup>刊。宮内庁書陵部蔵。左記書影は目録最終部。



B. 五山版、貞治六年(一一三六七)刊。目録最終行に「京都臨川寺の希杲による重刊」との刊記あり。書影は国会図書館所蔵本。



C. 五山版の複製版、刊行年不明。目録最終部に「孟榮刊施」とあり、福州から来朝した刻工の陳孟榮の名前が追加されている。<sup>④</sup>書影は関西大学図書館所蔵本。



D. 訓点と送り仮名つき、慶安二年(一六四九)の刊記、延宝三年(一六七五)の跋文あり(書影省略)。<sup>⑤</sup>

布施美術館にはB(巻三、六、十七欠)とC(巻四一六欠)が所蔵されている。両方ともに訓点の書入れがある。

## 三 『禅林類聚』に関する重要な先行研究

1. 梶谷宗忍『禅林類聚著語』七十三冊(大通院、一九九六年、第二版、三十七冊、一九九七年)  
初めて『禅林類聚』を活字化し<sup>⑥</sup>、採番、それぞれにタイトルを付す。自身による著語を加え、『碧巖録』『従容録』『宗門葛藤集』『無門関』『六祖壇経』との対応情報を記す。公案の総数を同書では四六七五とするが、巻二第三五三則「僧問如何是仏」の問いに対する答なども細かく数えれば五五八九点になると思われる。

2. 乙部魁芳『禅門公案大成—古則全集』十一冊(鴻盟社、一九一八年、国書刊行会、一九七四年、一九八六年)  
公案の書き下し五五一五点を独自に分類し配列したものの。そのほとんどが『禅林類聚』を底本としていることを再版で公表した。底本のエディションは不明。書き下しを収録するのみで、出典の情報がなく原文をたどることができない。<sup>⑧</sup>『碧巖録』『従容録』『無門関』などとの対応や、道元や白隠の著書の対応箇所をも記す。筆者の調査によれば『禅林類聚』五五八九点のうち、本則のみではあるが、五四九一点の書き下しを収録。後述の『禅林「跋」類聚』八二三点に関しては七九五点の書き下しがある。

## 四 『禅林「跋」類聚』について

原本から八一三点を抜き出した四巻本の抄本。古活字版として流布し、『続蔵経』にも収録された。<sup>⑩</sup>ただし、原本と明らかに相違する個所が三点確認できる。

『禅林類聚』七八六番は『続蔵経』では最終二行傍線部に無関係の文章が混入している。

① 洛浦僧問祖意教意是同是別師云日月並輪輝誰言別有路云恁麼則頭晦殊途事非一揆師云但自不亡羊何



須泣岐路

丹霞淳頌云月飾松影高低樹日照池心上下天赫赫

炎空非卓午团团秋夜不知円

即大行受記之縁亦就矣厥後衆縁不備果如所記

〔『禪林〔跋〕類聚〕新纂統蔵六七、一二九九番、二五頁中

一一七、『禪林類聚〕卷四、十五丁）

削られるべき最終部分が折り目の後にあったために間違つて残つたもの（図一）。この『統蔵經』の誤りは底本となつたであろう古活字版に由来する。しかしながら、同じく古活字版である布施美術館所蔵本と国会図書館所蔵本にはこの混乱がない。既にこの二つについては、使用されている活字の独自性が指摘されており、<sup>13</sup>はなはだ特異なエディションと言えるであろう。

以下の②と③の傍線部は、原本の『禪林類聚〕にはない文章。

② 慈明問僧、行脚須知有行脚事、作麼生是行脚事。云、

知。師云、知底事作麼生。云、山高水深。師云、念汝

遠来、且坐喫茶。僧云、諸諾。僧問、行脚不逢人時如

何。師云、釣糸絞水。<sup>14</sup>

石田董頌曰、老倒慈明為指迷、釣糸絞水出群機、

時人貪看蘆花白、不見沙鷗隔岸飛。（拈頌集声）

〔『禪林〔跋〕類聚〕七四頁上二三—中四、〔『禪林類聚〕卷

十二、十五丁左。梶谷〔『禪林類聚著語〕二五一九番、乙部

〔禪門公案大成〕二七九九番）

③ 睦州蹤禪師僧問、以一重去一重即不問、不以一重去

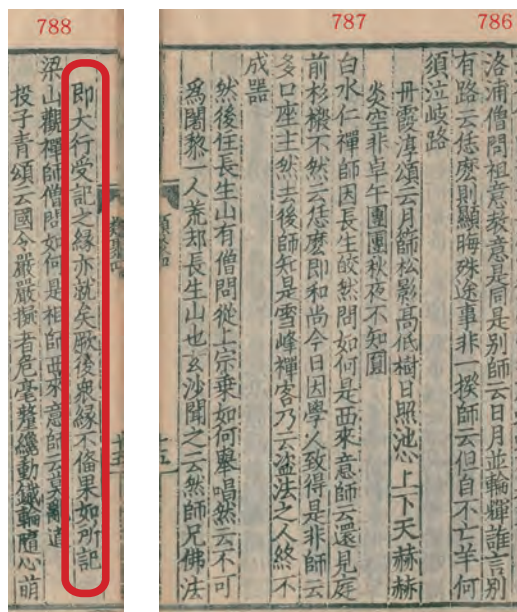
一重時如何。師云、昨日栽茄子、今朝種冬瓜。<sup>15</sup>

靈隱遠云、問者善問不解答、答者善答不解問。山僧

今日向飢鷹爪下奪肉、猛虎口裏橫身。為你諸人説箇

様子。登壇道士羽衣、輕呪力雖窮法転新。拇指破開

図一



国会図書館所蔵本の書影に、  
梶谷『禪林類聚著語』の番号を付した。

天地暗、蛇頭擲落鬼神驚。

南嶽勝頌云、披蓑側笠千峯上、引水澆蔬五老前、中

有瓜田難納履、睦州倒退在傍辺。咲庵悟云、昨日栽

茄子、今日種冬瓜、一声河滿子、和月落誰家。自得

暉云、重重去尽自平常、春暖風和日漸長、戶外鳥啼

声細碎、巖花狼籍滿山房。

〔『禪林〔跋〕類聚〕一一頁下七—十七、〔『禪林類聚〕卷

十八、五十丁左。梶谷〔『禪林類聚著語〕四一七九番、乙部

〔禪門公案大成〕二五二三番）

①の混乱は布施美術館所蔵本と国会図書館所蔵本にはないが、②と③はすべての『禪林〔跋〕類聚〕に共通すると思われる。事情は不明である。<sup>16</sup>

（日本古写経研究所兼任研究員、本学附属図書館職員）

（1）花園大学国際禅学研究所「電子達磨#3 禅語漢語考釈支援システム」。表示される書影はD。

（2）成立年については椎名宏雄「解題」『禪林類聚』

禅学典籍叢刊、第八卷（臨川書店、一九九九年）五八七—

五九八頁、川瀬一馬『五山版の研究』上巻（日本古書籍商協会、一九七〇年）四〇六—四〇八頁参照。

（3）駒澤大学図書館編『新纂禅籍目録』（一九六二年）二六六頁にはさらに詳細な分類がある。

（4）嵯峨臨川寺の刻工の希果と、福州から来朝した刻工陳猛榮については、前掲川瀬『五山版の研究』一三三—一四一頁、住吉朋彦『五山版「宗鏡録」に見える刻工名について』（かがみ）五十三号、二〇一三年）三頁参照。

（5）刊記ありの版と刊記なしの版については本稿注（6）を参照されたい。また、駒澤大学図書館による同図書館所蔵本三点の詳細な解題を参照のこと。

（6）同書は、①延宝乙卯〔延宝三年（一六七五）〕に出版された花園大学図書館蔵（中津自性寺本）正元師蠻の訓点本を底本とし、②慶安二年（一六四九）に出版された中野道伴刊行本と、③宮内庁所蔵本（元刊本）を照合したとのこと（梶谷『禪林類聚著語』別巻一、六丁右）。おそらく①と②は前掲訓点つきのDのことであり、①は刊記なし、②は刊記ありと推測される。つまり、Dの二点とAとを参照したものと考えられる。

（7）柳田聖山氏は以前から「五二七二則」と判断していた。柳田聖山「禅籍解題」（『禅家語録』二、世界古典文学全集三十六B、筑摩書房、一九七四年）五〇二頁二五四番、また、花園大学国際禅学研究所禅籍データベース『禪林類聚』の項目参照。また、柳田氏は同梶谷書に序文を寄せているが、そこでも「五二七二則」とする。柳田聖山「文字禅の新しい開花を喜ぶ」（梶谷『禪林類聚著語』別巻一、三丁右）。これに対し椎名宏雄氏は「公案と著語との合計数をいうのである」と述べている。前掲椎名「解題」五九四頁下段参照。

（8）椎名氏はこれを六十九点とする（前掲椎名「解題」五九五頁上段）が、正しくは七十二点。

（9）極めて不便なので、諸情報を対照できる仕組みを準備



している。

(10) 『続藏經』の底本となった古活字版については特定されていない。

(11) 古活字版の種類については、前掲『新纂禪籍目録』二六六頁、第四九回貴重書等指定委員会報告「新たな貴重書のご紹介」(『国会図書館月報』六五一号、二〇一五年)六頁を参照されたい。

(12) この混乱のない写本が存在する。西尾市岩瀬文庫所蔵の写本(214-0261-001)参照。

(13) 前掲「新たな貴重書のご紹介」六頁。

(14) 汾陽善昭の法嗣である石霜楚円の話。「慈明禪師語録」『古尊宿語録』巻十一(新纂統藏六八、一三一五番、六六頁中二四一下二)。「古尊宿語録」では最後の応答を欠くが、『五灯会元』巻十二(新纂統藏八十、一五六五番、二四十頁上十九—二十)はその応答のみを収録。

(15) 黄檗希運の法嗣である陳尊宿の話として『景德伝灯録』巻十二にでる。景德伝灯録研究会編『景德伝灯録』四(一九九七年、禅文化研究所)三七五頁参照。「一重」の意味は不明。『五灯会元』では巻四(一〇一頁中十一—十二)所収。

(16) 『中華大藏經・統編』に『禪林類聚』が収録され刊行された。二二四—二二五冊、一四三二番(漢傳撰著部四、十三—十四冊、中華書局、二〇二四年)。底本はB。巻十七の欠落個所に言及しており、国会図書館所蔵本であろう。統藏經所収『禪林「跋」類聚』とDによる校勘。各則の典拠は示されていないが、『投子義青禪師語録』『五灯会元』『白雲守端禪師広録』『禪宗頌古聯珠通集』『建中靖国統灯録』『指月録』『嘉泰普灯録』『雪峰語録』『臨濟録』『宗門統要集』『聯灯会要』『破庵祖先禪師語録』『五家正宗贊』『天聖広灯録』『景德伝灯録』などなどによって、三十以上の訂正がなされている。

## 新刊紹介

日本古写経善本叢刊第11輯

『国宝金剛場陀羅尼經』

長尾 杏樹

『金剛場陀羅尼經』は「般若經」の思想的伝統を継承しながら、独自の空性觀を展開する大乘經典である。原題を\**Vajraṃaṇḍhārāṇī*と推定する本經は、デレアヌ・フロリン教授が指摘するように、インド仏敎史の文脈においては十分な光が当てられることなく、仏敎学における本格的な研究は行われてこなかった。他方、日本に伝存する『金剛場陀羅尼經』は、わが国最古の紀年(六八六年)を有する古写経として国宝に指定され、書誌学的研究の対象として注目を集めてきた。とりわけ近年、この国宝本の成立年代をめぐる藤本孝一氏、赤尾榮慶氏、落合俊典教授らが展開した議論は、

仏敎学界に新たな研究の展望を開くこととなった。すなわち、本經の全容解明が待たれるようになったのである。

\* \*

仏敎学において原典研究は方法論的基盤をなすが、本經のサンسكريット本は散逸しているため、内容解明には漢語訳とチベット語訳の詳細な検討が必要とされた。本書はこの課題にこたえるべく、「資料篇」において国宝本の完全な影印を収録し、さらに本經と別訳『金剛上味陀羅尼經』について、複数の日本古写経本を参照した校合と訓読を掲載している。各テクストの文献学的特徴については、赤尾榮慶氏、杉本一樹氏、落合俊典教授による解題の詳細な考察を参照されたい。

「研究篇」では、宮崎展昌氏と筆者によるチベット語訳のテクスト校合と和訳の提示により、漢訳に残された未解明の表現の理解が大きく前進した。特筆すべきは、斎藤明敎教授の指導のもと、チベット語訳の読解を通じて七世紀のインド中觀派思想を代表する『明句論』、ならびに九世紀のチベットで成立した『翻訳名義大集』に本經の引用を見出したことである。この発見はインド・チベット仏敎における本經の思想的な広がりを示す重要な成果と言える。

『国宝 金剛場陀羅尼經』は本經の諸訳本に基づいた文献学的研究の成果を示す優れた学術書である。この研究を通じて、大乘仏敎における陀羅尼思想研究の新たな可能性が開かれることを期待したい。

(本学日本古写経研究所RA)





## 落合科研費研究室の活動報告

「奈良朝勅定一切経」データベース構築プロジェクト

赤塚祐道・青木佳伶

落合俊典教授を代表とする科研費「奈良朝勅定一切経」の総合的研究—漢文仏教テキストの資料的基盤の再構築に向けて—では、光明皇后御願の五月一日経を中心として、五月十一日経、神護慶雲経など、いわゆる勅定の一切経に関する研究を行ってきました。令和二年の四月より始まった研究も最終年度を迎え、研究成果をまとめる段階となりました。

さて、本科研が始まりました令和二年四月といえますとちょうどCOVID19が蔓延し始めた頃で、あらゆる事業が思うように進められなかったことを思い返します。本科研も例外ではなく、予定していた研究会が何度となく順延・中止となりました。しかしオンラインによって、主たる課題であったデータベースの構築について会議・研究を進めることができたことは今の時代であったからでしょう。この5年間の蓄積、そして今後もデータの修正を順次行っていかなければなりません、暫定的とはいながらもデータベースを公開するまでに至ったのもこの事業に携わってきた共同研究者の先生方、そして研究室を支えてくださったスタッフ・院生の皆様のお力添えがあったからこそ思っております。

実務チームは、牽引役を赤塚・青木が担当し、日本古写経研究所主任研究員の前島信也氏をアドバイザーに、そのほかスタッフとして国際仏教学大学院大学の卒業生である新田優氏、浅野学氏、張美僑氏、劉園園氏、同大学在学生の長尾杏樹氏、杉山兵介氏、筑波大学在学生であった

木下碧氏、駒沢大学在学生の菅野史礎氏、そして大正大学卒業生である伊藤菜乃子氏らに、データベース構築に関わる実務作業などを手助け頂きました。

課題となりましたデータベースですが、基本となるデータは丸善雄松堂から販売されてます聖語蔵のDVDが参考となります。また宮崎健司先生の『日本古代の写経と社会』や田中塊堂『日本古写経現存目録』、また先行研究も含め、正倉院展や東大寺展、博物館・美術館で催された展示図録などを活用しながら採録に努めました。ただ実際にデータを入力していきますと所蔵先の移動があったり、また所在がわからないものもあり足りないデータもあります。

一方、このように五月一日経を追っていますと楽しみもあります。まずは「書之美」。天平写経の美しさはその後の写経とは一線を画し、筆の入り、横画、縦画の強弱といった一点一画の筆遣い、流麗なる書体を前に国家事業としての重みを感じずにはいられません。実に見事な書体であることは誰もが認め、現在行われる写経の手本ともなる書体がこの奈良写経にあるわけです。また紙についても打紙の艶・風合い、大きさ、野線の引き方に至るまでれをとって天平写経の特徴があります。『大正蔵』やテキストデータベースでは感じることができない、千五百前の写経の過程を感じることができたのも本科研の醍醐味だったと思います。

このように五月一日経を研究対象としてきた五年間のうちには、石山寺、勸修寺、智積院、京都国立博物館、九州国立博物館など、各寺院様、博物館様のご理解ご協力のもと

実際に貴重な文献と向かい合うことができた。目の前の天平写経からは写経所の声が聞こえてくるかのような雰囲気にかまれ、データとして画面上に見る写経とは異なる本物の雰囲気を感じることができました。

写経所で完成した經典を、今この時代にデータとして保存し、情報を入力することで今の時代の写経研究の基礎データを作ることができたのではないかと思っております。

一千三百年弱もの昔に書写された經典が今に伝えられ、このように取り上げられるとは当時の人も考えなかったことでしょう。少し書き入れた朱書きやわずかなメモでも大切な研究材料です。朱書き・校訂の系譜は書写の後にチェックされた別の系譜を示すものですし、かつて日本に存在した写経の存在が見えてきます。

まだまだ研究は緒に就いたところではありませんが、本プロジェクトがまた次の時代に活用されることを念じてやみません。

(本学特任研究員)





# バチカン図書館の日本古写経と中国元王朝の紺紙金字写経

落合 俊典

## ◆院政期写『大般若経』卷一八二

バチカン図書館に日本古写経が所蔵されていて、その評価をしてみられないかと令和四年（二〇二二）十月四日、国際日本文化研究センターの小川仁氏から連絡があった。バチカンと言えば基督教カソリックの大殿堂、所謂大本山である。そのようなところに近代の仏教関係図書ではなく、日本古写経があるのは些か驚きであった。

令和五年（二〇二三）一月三十日（月）から二月三日（金）の五日間、バチカン市国にある図書館を訪問し、話題となっている日本古写経を調査した。そもそもその来歴は、去る昭和八年（一九三三）十二月に新潟の書家高橋松願氏が教皇ピオ十一世に寄贈したものである。日本の古写経は五点だが、すべて『大般若経』（六百巻）の部分に相当する。特に最初の一点の平安時代の『大般若経』巻一八二は、巻首の二紙を失っているが全十五紙の写経で分量が多い。これは卷子本であったものを横幅20センチ前後の折本にした形にして保存している。

戦前の昭和時代に高橋松願氏が入手したもののようであるが、当時には書画骨董を専門とする日本橋などの店には奈良平安の古写経も市中に出回っていたはずである。名品は然るべき所蔵機関が有するようになったのである

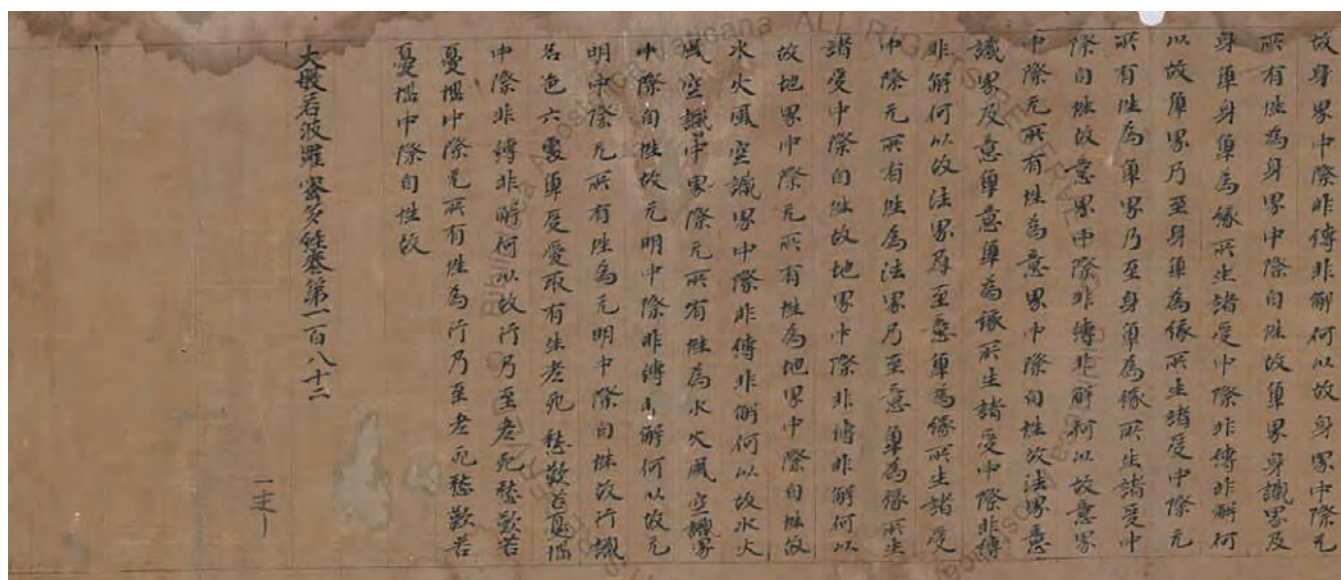
が、それらの状況を窺うのには田中塊堂著『古写経綜鑑』（昭和十七年）はそのよき手引書であろう。高橋松願氏がどこから入手したか不明であるが、平安写経や鎌倉写経などの経巻を購入することは必ずしも困難ではなかったと思われる。それらの日本古写経をキリスト教の総本山バチカンの教皇宛てに寄贈したことが稀有なることである。氏の意気込みが贈呈文から強く感じられる。

\* \*

『大般若経』巻一八二の調査結果は以下の通りである。

- ① 第一紙と第十五紙は横の長さが短い、これは首欠というように巻首の二紙分が欠けているからで、始まりは中途半端であるため短い。巻尾も短いのが通常である。第二紙から第十四紙まで全て二十八行となっていて紙の長さもほぼ51cm前後である。一紙二十八行は盛唐期における規範的な法量であるから、本経巻の底本はその流れを汲む藏経本であったと想定される。天平写経の五月一日経と比較できれば良いのであるが、残念ながら正倉院聖語蔵には該当する大般若波羅蜜多経が現存していない。

- ② 本経巻には都合六箇所の誤写が存したが、それらを訂正符や倒置記号などで正している。巻末に「二交了」



バチカン図書館蔵『大般若波羅蜜多経』第百八十二巻  
Copyright©Biblioteca Apostolica Vaticana



とあるが、これは「一校了」と同意義であり、正確に校訂した証である。

③ 本経巻と比較した経巻は、高麗再雕版・南宋思溪版・元普寧藏版・明嘉興版の諸刊本大藏経と、金剛寺一切経本・興聖寺一切経本・根津美術館藏春日若宮本である。系統的にはこれらのどれにも該当しないが、日本の由緒ある経蔵の院政期写経であると想定される。

### ◆中国元王朝紺紙金字写経

バチカン図書館の図書記号Vat.estr.ori.1は、バチカン図書館の極東オリエント書籍の第一番目を意味しているが、この典籍が従来殆ど知られていなかった稀覯本と思われる。

その概要は、紺紙金字にて書写され、界線も金で引かれている装飾経である。縦33・4 cmの紺紙にゆとりを以て一行十七字にて書かれている。表紙の装丁は金と銀で宝相華文様が丹念かつ精巧に描かれ、この文様と相似する高麗写経や中尊寺一切経の宝相華文様と比較して

少しも遜色ない。これは宋元の仏教文化の下で作成された描かれた文様の規範が高麗、日本へ伝播した結果とも言えよう。ただ、高麗の工人が深く関与した可能性もあり、美術史家の今後の詳しい研究が俟たれる。とまれ、元王朝の高官「梁冠者」が供養者となつて奉じられた宮廷写経の栄耀栄華の装飾経が異国バチカンで蘇るとは実に奇異なことである。その概要は以下の通りである。

\* \*

外題は「大方広仏華嚴経巻第五十六」。表紙は縦33・4 cm×横12・2 cm。経絵は縦24・5 cm×横48・0 cm。金筆で精巧に彩られている。経絵の中に願文（十行）あり。また「離世間品三十八之四」「如虚空心」「如蓮華心」「如淨日心」「如須彌山王心」「如優曇鉢華心」「如金剛心」「如大地心」の八つの標題が書かれている。これらはいずれも八十華嚴の離世間品の経文から採録した文句である。

その願文は、

榮祿大夫典瑞院使梁冠者  
謹啓信心金書

大方廣佛華嚴經周譯全部功德上祝  
皇帝萬壽

聖后齊年

太子千秋合宮天眷文武百官同增祿筭恭願

金輪與法輪統御

舜日同

佛日長明凡日有情俱洽利益

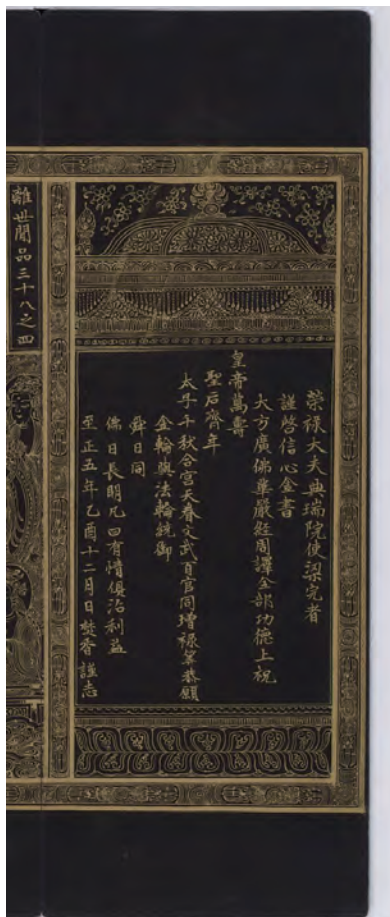
至正五年乙酉十二月日焚香謹志

この願文の意味するところは裏付けが取れないが、一応「榮祿大夫の典瑞院使である梁冠者」が「周訳『大方広仏華嚴経』八十巻」を書写し上進したようである。典瑞院使は皇帝の玉璽を預る長官である。その年次は「至正五年乙酉十二月」とある。これは西暦一三四五年であり、元王朝の皇帝は順帝トゴン・テムル（在位一三三三—一三六八）である。この時の皇后は高麗出身の奇皇后（一二二五—一二六九）とされていて、紺紙金字経が高麗写経に相似していることと関係があるのだろうか。今後の詳しい調査が俟たれる。

（本学教授）



バチカン図書館蔵  
『大方広仏華嚴経』巻第五十六表紙  
Copyright©Biblioteca Apostolica Vaticana



バチカン図書館蔵  
『大方広仏華嚴経』巻第五十六願文  
Copyright©Biblioteca Apostolica Vaticana



## 既刊書

### ○『いとくら』1～12号（非売品）

本書は本学ホームページ「国際仏教学大学院大学  
学術成果コレクション」上からダウンロードできま  
す。バックナンバーを希望される方は下記連絡先に  
お知らせ下さい。

### ○日本古写経善本叢刊（非売品）

第1輯『玄應撰一切経音義二十五卷』

第2輯『大乘起信論』

第3輯『金剛寺藏 觀無量壽經  
無量壽經優婆塞持念願生偈註卷下』

第4輯『集諸經禮懺儀卷下』

第5輯『書陵部藏 無量壽經記  
身延文庫藏 無量壽經述記』

第6輯『金剛寺藏 寶篋印陀羅尼經』

第7輯『國際佛教學大學院大學藏 金剛寺藏  
摩訶止觀 卷第一』

第8輯『續高僧傳 卷四 卷六』

第9輯『高僧傳 卷五  
續高僧傳 卷二八 卷二九 卷三〇』

第10輯『法道寺藏天平写経 雜阿含經卷第三十六  
岩屋寺藏思溪版 高僧伝卷第一』

第11輯『国宝 金剛場陀羅尼經』

### ○『日本現存八種一切経対照目録』改訂版（非売品）

本書は本学ホームページ「国際仏教学大学院大学  
学術成果コレクション」上からダウンロードできます。

### ○『佛教文献と文学』

日臺共同ワークショップの記録 2007（非売品）

### ○『愛知県新城市徳運寺古写経調査報告書』

徳運寺の古写経（非売品）

### ○『古写経研究の最前線』

—シンポジウム講演資料集成—（非売品）

### ○『国際シンポジウム報告書』

東アジア仏教写本研究（非売品）

### ○『根津美術館蔵「春日若宮大般若経および厨子」 調査報告書』（非売品）

## スタッフ紹介

### 研究所所長

落合俊典（本学教授・理事長）

### 研究所兼任研究員

藤井教公（本学教授）

アレクス・フロリン

（本学教授・学長 本学附置国際仏教学研究所有所長）

斉藤 明（本学教授）

幅田裕美（本学教授）

池 麗梅（本学教授）

末木康弘（本学仏教書誌研究プロジェクト主任研究員）

斉藤達也（本学附属図書館副館長）

池田道浩（本学附属図書館員）

信賀加奈子（本学附属図書館員）

### 特別研究員

赤尾栄慶（京都国立博物館名誉館員）

牧野和夫（実践女子大学研究推進機構研究員）

### 学内研究協力者

赤塚祐道（本学特任研究員）

青木佳伶（本学特任研究員）

### 主任研究員

前島信也

### 研究補助員

長尾杏樹（RA）

王 雪（RA）

深見慧隆

浅野 学

### 本号の編輯担当

浅野 学

（令和7年3月現在）

## CONTENTS

Toshinori OCHIAI, Twelve characters written in the same hand as the National Treasure the <i>Jin gang chang tuo Luo ni jing</i> manuscript	1
Eikei AKAO, The Fuse Art Museum: Museum Introduction	3
Kei TABAYASHI, About the <i>Gazu Sanmon</i> Manuscript Owned by the Fuse Art Museum	6
Michihiro IKEDA, <i>The Zenrin Ruijū and the Zenrin Batsu Ruijū</i>	9
Book Review	
Anju NAGAO, <i>Bibliotheca Codicologica Nipponica XI</i>	11
Yūdō AKATSUKA and Chialin AOKI, <i>Ochiai Research Laboratory Activity Report: Database Construction Project for the 'Nara Period Imperially Commissioned Issaikyo'</i>	12
Toshinori OCHIAI, Japanese Ancient Buddhist Manuscripts and Copied Sutra in Gold Lettering on Navy-blue Paper from the Yuan Dynasty Preserved in the Vatican Library	13
Introducing Previous Publication and current staff	15

国際仏教学大学院大学  
日本古写経研究所ニュースレター

Newsletter of the Research Institute for the Study of Old  
Japanese Manuscripts of Buddhist Scriptures  
of the International College for Postgraduate Buddhist Studies

## いとくら 第13号

令和7年3月25日発行

編集・発行 国際仏教学大学院大学  
日本古写経研究所  
〒112-0003 東京都文京区春日2-8-9  
URL <http://www.icabs.ac.jp>  
E-mail [nihonkoshakyo@icabs.ac.jp](mailto:nihonkoshakyo@icabs.ac.jp)

印刷 株式会社 高山

## ITOKURA Vol.XIII

Published by Research Institute for Japanese Manuscripts  
of Buddhist Scriptures of the International College for  
Postgraduate Buddhist Studies  
2-8-9 Kasuga, Bunkyo-ku, Tokyo 112-0003, Japan  
© Research Institute for Japanese Manuscripts of Buddhist  
Scriptures of the International College for Postgraduate  
Buddhist Studies 2025  
Printed in Japan at Takayama Co. Ltd., Tokyo